イエスは主なり

日本クリスチャン・アシュラム連盟

日本アシュラム

アシュラムとはスタンレー・ジョーンズ師がインドの退修方式を取り入れて創設されたキリスト教の新しい祈祷運動である。

開心・静聴・充満・献身・奉仕　155号

「霊の乳をいただく」

ペトロの第一の手紙　1章22節～2章3節

有馬　歳弘

人の健康はその人が摂取する食事によっています。何を食べても満足感があれば良いとはいえません。私たちにとっては、霊の乳を飲むこと以外にはありません。しかも、一度に食べ溜めすることは、不可能です。毎日、毎日いただくことが重要です。

ペトロはイエス様といつも近いところで生活した人です。しかし、イエス様のお考えとはずれていた弟子でありました。十字架の道を弟子たちに告げられた時、それを止めてひどいお叱りを受けたり、主イエスの受けられた偽りに満ちた裁きを横目に、自分とイエス様との関係を否定し、無関係であると念を入れて3度も言ってしまいました。見ている「自分」、判断している「自分」、耳で聞いた「自分」を第一にしています。主の十字架での死、ローマの兵隊が槍で脇腹を刺して確認したこと、アリマタヤのヨセフの墓に葬られたことを目撃したのです。それはまぎれもない「自分は見た」ということでした。しかし、救いを信じるとは、神は「何を」私に、私の認識や、経験から来る判断を超えてなされたか、その神の事実を真実として受け取ることことでしょう。

ペトロは、1章26節で「あなたがたは、朽ちる種からではなく、朽ちない種から、すなわち、神の変わることのない生きた言葉によって新たに生れたのです」。だから、信仰者は「混じり気のない霊の乳を慕い求めなさい」と勧めているのです。「霊の乳」こそ、健全に信仰生活を養う大切な糧です。

「新たに生れた」者は、悪意、偽り、偽善、ねたみ、悪口を捨て去る、のです。トゥルニエという精神病理医は「ねたみは教養のない人よりも、むしろ、教養のある人の方が激しい」と言っています。それは、学問や教養ではどうにもならない、人間の中に住み着いている罪です。主イエスも、祭司長、学者たちの「ねたみ」によって、死に追いやられたことを思うと、まことに厄介なものです。それだからこそ、信仰生活は自分の力によって生きるのではなく、神の力によって生きるのだと言うことをしっかりと知る必要があります。それが「混じり気がない霊の乳」、即ち、神の言葉を慕って行きたいと思います。

（日本キリスト教団青梅教会牧師）

霊想

『自由へと召し出された者』
ガラテヤの信徒への手紙5の13～25

東京新生教会　横山　義孝

一、キリスト者とは「自由を得るために召し出された」（ガラテヤ5の13）者です。ところが多くのキリスト者に於てこの召しと救いが実質的に成就していない現実を見ます。アシュラムとは、聖霊の導きによって「この自由」を自らの内に与えて頂くための祈りの運動です。そもそも、創世記一～三章によれば、人間が神の像に似せて造られたということは、神への全き信頼と服従の故に、霊的存在とされ、神を愛し人を愛することに於て、全き自由なるものとして存在を許されたということです。その自由の故に善を選び、義を行うことに於て、強いられてでなく、自発的に喜んでこれを行うことが出来ていたのです。神を信じることに於て、神が良しとする善を行うことに於て、喜びと感謝、祝福と希望に身を躍らせながら日々を過ごした楽園の生活でした。

ところが人間が楽園に於て不従順、自己絶対化の罪を犯した結果、神を喜ぶ信仰は失われ、不従順、不信仰がその性格となり魂全体に歪みが生じ、神への不信、反逆に快楽を見出すものとなってしまい、罪の奴隷となって、楽園から追放される結果となってしまったのです。（創3の23～24）「罪の支払う報酬は死である。しかし神の賜物はキリストイエスに於る永遠の命である」（ロマ6の23）とある通りです。父なる神はこの人間の悲惨を憐み、み子イエスキリストを地上に降して下さって、十字架によって贖いのみわざを全うして下さり、神に対する罪からの救いの道を開いて下さったのでした。それがキリストイエスを信じる信仰による、罪とその呪いからの自由を体験する道です。（ガラテヤ5の1）。何という驚くべき救いの恵みでしょう。私たちは罪と死の奴隷たる状態から信仰の故に既に解放されているのです。贖罪の恵みに心から感謝いたしましょう。

二、霊的自由は聖霊の賜物。

さて、それでは私たちキリスト者は、現実の具体的な日常の生活に於て、この自由を自らのものとして体験できているのでしょうか。「いつも喜んでいる、絶えず祈っている、どんなことにも感謝する」（エテサ5の16～18）ことが出来ているでしょうか。七の七十倍まで人の罪を赦すことが出来ているでしょうか。自分を義として人を絶対に裁くことをしないでいるでしょうか（マタイ7の1）。私たちの肉のからだは罪によって呪われてしまっていますから、頭で知性的に何が良いこと、何がやってはいけないことかわかっていても、それで直ちに、自由に善なることが出来るとは限らないのです。むしろ二律背反の苦しみに苛まれる結果になってしまうのです（ロマ7の22～24）。この魂を肉的な不自由な現実から私たちを解放して下さるお方が聖霊なる神です。「キリストイエスによって命をもたらす霊の法則が、罪と死との法則からあなたを解放した」（ロマ8の2）とある通りです。

三、霊の導きに従って歩め

さて、それではどうしたらこの聖霊の恵みに与ることが出来るのでしょうか。聖霊は既に信じる者に与えられています。先ずこの信仰を確認し、更にこの聖霊に満たされる（エペソ5の18）ことを願い求める祈りが必須条件です（ルカ11の13）。この聖霊を求める祈りは、聖霊の導きに従う歩みへと高められて行きます。聖霊は求める者に、信じる者に（ガラ3の14）従う者に与えられるからです（使徒5の32）。そして最も大きな聖霊なる神のご本質は、愛と宣教、恵みと証しの霊であるということです。聖霊はアガペーの愛を以て人に接する時、キリストの救いの福音を人々に大胆に語る時に特に注がれる賜物です。使徒言行録に於て、弟子達が病の癒しや多くの奇跡を行っているのは、それ自体が目的ではなく、キリストの福音を大胆率直に語り伝える宣教のわざの過程で副産物のように、不思議なわざが結果的になされたのです。彼ら弟子たちの内に存在したものは、自由に喜びをもって臆することなく、主イエスを救主として証しをするという宣教のわざがすべてであったのです。それは彼らも、今日のわたしたちも、その自由人へと召された者だからです。

立証

『祈りは答えられる』
沼津シオンキリスト教会

堀内　稔

私の実家は東京・杉並区高円寺です。仕事は静岡県公立中学校の教職を六年前に定年退職し現在、講師をしております。私はアシュラムの集会には自宅から車で近いということもあり、ここ数年毎年楽しみにして出席しております。一昨年九十二歳で昇天した父は新宿から箱根行きのバスを便利に利用して、毎年

八十九歳まで参加をし「静聴と祈り」の時を学び、非常に恵みある生活をしておりました。その頃から私は、父に祈られていることがひしひしと感じられるようになりました。帰省した折りに、このことを母に話しますと、「お父さんは毎日、名を挙げて祈っていましたよ。」と母が言いました。私は、父への感謝の思いでいっぱいになり、自分も又、二人の子どものために祈る者とならなければと思いました。

息子が大学生の時は、就職氷河期でした。祈らざるを得ない状況です。「もし、あなたがたのうちふたりが、どんな事でも、地上で心を一つにして祈るなら、天におられるわたしの父は、それをかなえてくださいます。ふたりでも三人でも、わたしの名において集まる所には、わたしもその中にいるからです。」（マタイ18：19～20）十字架を仰ぎ、妻と心を合わせて、み言葉を盾にして祈りました。毎晩祈りを続けていくうちに私たちの不安な心が取り除かれ、平安が与えられ、神様は祈りを聞いて下さる、必ず良いところに就職が与えられるという確信のようなものがもてるようになりました。祈ってはすぐに感謝の祈りを献げました。就職活動が始まったときから活動費が底をつかないように息子の通帳の残高をいつも確認しておりました。結果は、本人が十分満足する会社に決まりましたので、皆で主の聖名をほめたたえました。

今、私は六十代半ばになり、夫婦二人だけの生活になり、老後のことを考えるようになりました。本当に神様は、箴言にあるように「かの日をほほえみながら後の日を待つ」このみことば通りになるのでしょうか、と。そこで父の晩年はどうであったかと思いを巡らすと、父は主日礼拝を重んじ、家では茶の間に座る横にいつも聖書を置き、人がお茶を一日に何度も飲むように、聖書を開いては黙想をしている、といった風でした。実家は古いすきま風の入る寒い家で築六十年の建て替える時がきていました。その頃教会も会堂建築をすることになり、父はまず会堂建築が先にと考え、教会が建ってから、自分の家を建てました。「神の国とその義をまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます。」（マタイ6：33）その後、二世帯住宅で弟家族と同居することになり、弟は会社を経営している経済力で父の経済も豊かに祝されました。弟の会社はいつも順風満帆というわけではありませんでした。経営の安定は父の祈りによって支えられていたことは確かです。経済だけでなく、父の回りには、いつも温かいぬくもりがありました。世話をしてくれる息子夫婦、娘夫婦、孫、曾孫達に囲まれて、その上、教会の皆様に良くしていただきました。箴言のみ言葉そのもののように、父の晩年は麗しいものでした。心から主の御名を崇めます。

第40回 城北アシュラム報告

飯島　紀子

第四〇回、城北アシュラムは二〇〇九年二月十一日（水）午前十時より、日本ホーリネス教団　池の上キリスト教会を会場として、六〇名の参加者により、開催されました。

当日朝、原田謙牧師が急に体調を崩され、一同、祈りのうちに準備祈祷教会、そして開心の時へと導かれました。島津牧師のアシュラムについての丁寧なご説明があり、初参加の方も理解が進まれたと思いました。

祈りの細胞の一回目があり、少人数で当日のニードを出し合い、主の前にも必要が満たされる様祈り合いました。次いで、記念撮影を礼拝堂で行いました。その後、地下一階で食事となり、各教会の御紹介もあり、楽しいお交わりの時となりました。

午後から杉本泉師による「静聴の時」にヨエル書二章を開かれ、静聴をいたしました。18節、主は自分の地をねたむほど愛し、ご自分の民をあわれまれた。27節、あなたがたはイスラエルの真中にわたしがいることを知り、わたしがあなたの神、主でありほかにはいないことを知る。等、豊かにみことばを頂きました。

福音の時は、飯島延浩兄が司会をされ、横山義孝師がメッセージをして下さいました。ガラテヤ五章十三節～二六節「御霊によって歩みなさい。」と特に、横山先生御自身

が、スタンレー・ジョーンズ師の第一回アシュラムに於いて、聖霊の充満を体験されたお証詞を通し、御霊による自由、御霊による讃美、そして、御霊の実を結ばせる、キリストの愛による生活をお勧め下さいました。

二度目の祈りの細胞に於いて、お互いにいただいた恵みについて、充分お分ち合いも出来感謝でした。最後の有馬歳弘師による「充満の時」は、主から与えられた恵みを分かち合いました。私自身も「山崎製パンの創業の地」である市川へ引越しをすることが出来て感謝です。どのような心構えで歩むべきかと導きを祈ったのですが、ニードそのものが変えられてしまいました。今、家庭集会に来られている方々のうち、親しい方を亡くされた方が三人います。どうか、お一人お一人に天来の慰めを与え、信仰によって勝利できますよう知恵と力を与えて下さい。」と祈りました。そして再臨の信仰が与えられました。

参加された方々が、それぞれ、聖霊の満たしをいただき、感謝をもって午後四時四五分散会いたしました。城北アシュラムの御報告とさせていただきます。

第16回 東京新生アシュラム報告

横山　静子

09年2月21日（土）当東京新生教会アシュラムが始まりました。今年当教会の創立20年を迎えますが、会堂が新築された年度から始めて今年第16回になります。21（土）午後7時より8時開会のディボーションを兼ねて「開心の時」。今回のテーマは「イエスは主である」（Ⅰコリント12の3）です。助言者によってアシュラムとは何か、について解説を加えつつ、魂のニードを互いに分かちあう時です。8時～9時この開心の時をそのまま延長して三つの「祈りのグループ」に分かれ、少数で胸襟を開いた交わりの中で開心の時が継続されました。それぞれニードが分かち合われたあと右隣の人のために祈って終わります。次に夜10時から翌朝7時までの連鎖祈祷に入りました。アシュラムの特徴の一つはこの「連鎖祈祷」にあります。一時間づつ担当表に予め記名して、夜を徹して祈りを継続します。読むべき聖書箇所並びに祈りの課題が指定されていますので、これを参考にして各自の家庭に於て祈りの時間を聖別して実施します。二日目の22(日)は平常の聖日礼拝の日ですが、アシュラムのプログラムの一環として守ります。まず午前9時45分から10時20分まで「静聴の時」を持ちました。第一テサロニケ5章と詩編51篇を静から読み与えられた恵の分かちあいがなされます。その時前夜の「連鎖祈祷」に於て受けた恵みも導かれるままに分かち合います。次いで10時30分から公同礼拝が献げられました。横山基生師のメッセージの前、堀内稔兄（沼津シオンキリスト教会会員）がゲスト立証者として迎えられ、約10分の祈りについての立証がなされました。同兄は三時の終了までプログラムに参加されました。詩篇46篇から「力を捨てて知る」と題したメッセージが語られ、信仰による魂の明け渡しについて宣べ伝えられました。

礼拝後は0時～1時各自持参のお弁当によって昼食、交わりの時が和気藹々の内に恵み豊に持たれました。当教会では月毎の教会アシュラムには他教会から、その教会を代表する信徒（該当教会の牧師の了承を得て）をお迎えし、証しを伺い、また教派を越えた教会相互の交わりの時としています。午後は1時～2時を第二回の「祈りのグループ」（礼拝から参加するかたのためグループを一つ増やします）をもち、更に祈りと交わりを深め、2時～3時を最後の「充満の時」として共に今回のアシュラムで与えられた恵みをもう一度一同で分かちあい、二人ずつ組になって祈り、最後に全員腕を組みあって友情のまがきを組み「イエスは主である」のテーマを三本指を掲げて唱和して祈りの内に終了しました。全参加者24名でした。

各地区アシュラムの上に祝福を祈りつつ（Y.）

〒一八一-〇〇三鷹市井口3-15-6
池の上キリスト教会内
日本クリスチャン・アシュラム連盟
振替口座　東京〇一〇〇-一-四五五八
理事長　大石嗣郎